
無敵スライム

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵スライム

【NZコード】

N2004X

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

最弱のモンスターはなんだろう？ その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってこう、“スライム”だ。

だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。

無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！

第一ゲル 無敵S VS パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがつた、シマリツコでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなど等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱つつたらボーッつつ立ってるだけのナマケモノキーダラ”と言つ。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウイップスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言つてんだよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろ？が！ 急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れていようものなら中級者と言えどこする恐れがあります。その点、初步的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウイップスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！ デッドリーフなら、枯れてる

しちょっとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まあまあ待て待て、と首を諫めつつ言つ。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よおく考えてみろや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねえか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？　どんな初心者でもそいつは倒せらあ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうな。因みに今年で六つですが」

「えつ、えつ、何？　そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそつと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいつセーの、せでモンスター名を叫んだ。

「――「スライム」」

と。スライムとは、最早冒険者たちにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概是大きさにして一十から三十カラム前後（約一十から三十五セ

ンチ）、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから一回り位大きい程。

地方によつて違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言わるが実際には水分を内包している表皮を破つてしまえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴つていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランディングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう氣の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかつた……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かつている頃だつた。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行つて来る”と言つ、

あれうことが町外れの草むらへと走つて行つてしまつたのだ。

「これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そつかと思つたその時であつた。

ガサツ、と草むらが揺れ動く。

「……？」

が、彼は腐つてもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとつた。流れる様な一拳一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元にない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしろ素手でやり合えるか？ 酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじいっ、と凝視した。

それは思ったよりも小さくて……。

「えつ……？」

子供の遊具を一回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじやねえか！」

大方道に迷つたのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かつたところで、一瞬でも自分を恐怖させたちつぽけなそれを、リーダーは許す事が出来なかつた。

。 さうだ蹴りでもくれてやうひ、そう思い再び雑魚を視界に收め

(あん? どこ行つた……?)

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリー
ダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

パーティー昇龍のリーダー、ブレッジに勝利した。

……翌日、ブレッドは瀕死の状態で発見され、教会の世話をになつたといつ。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

「な、なあ、ボクたち だいじょうぶだよな?」

ひまわりの
リーダーは
いつた。

「だ、だいじょうぶさ
たびだつまえに
かわのよろい
をかつ
ただろ？」

ガサツ

「ひつ
モ、モンスター！？」

モンスター　スライムがあらわれた

「な、なんだよ スライムじやなにか こんなやつ たりやと…

▪
▪
▪
L

バシッ！ ピシャッ！

パーティーひまわりにしようりした。

第三ゲル 無敵S VS 新米勇者マット（勇者LV.2）

ガサツ

ん？

モンスター　スライムがあらわれた

「こめれいかよー。こニギヤ しづねやを たぬしてやる こベガ
ええ！」

ベチイツ！

କାହାର କାହାର

う!?

アシタ ハシナリトコトタ トコトタ トコトタ トコトタ

第四ゲル 無敵S VS 初級者ウイザード リリイル (ウイザードLV.2)

「ああ、」まつたわ……まほつつかいすぎで

114

ガサツ

「えつ ちよ、じんなとわい？」

モンスター スライムがあらわれた

な、なーんだ アンタなんか つえの だげきいつばつで……」

ズドッ！

ショーキング・ワイヤード リリール にショウウリした

第五ゲル 無敵S VS なりたて拳士ダベツカ（拳士L v.4）

「よしつ あといつたいだ あといつたいたおせば ゴールドが
たりて あたらしいグローブ かえる！」

ガサツ
……

「きたああああ かねをだせえええ！」

モンスター スライムがあらわれた

「ウソだろつ！？ いつせんにも ならない……」

グバツ！

「う、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオー！？」

けんしダベツカに しようりした

第六ゲル 無敵S VS 商人見習いシンゴ（商人L V・5）

「まったく はやくほかのメンバーを あつめないと そぞいもあんしんして ちょうどつできません」

ガサツ……

「なつ モンスターですか！ じいは けむりだまでにげ……」

モンスター スライムがあらわれた

「ああ、なんだ おどろかさないでください……」

ビチャアアツ！

「なんですかオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オー！？」

「ようになみならい シンゴに しようつした

第七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン（勇者L・V・？？）

ガサツ

「！？ そーだー！」

セインは、ドラゴンスライサーをばなつた。

ズバッ！

モンスター
スライムは
まつぶたつになつた

「うと スライムだったのか 『ごめんな ものすゞ』 さつをを
かんじたから って、スライム！？ まさか ボクの『きょう
ちかくまで もどりてしまつたのかー？』

セインはあわてはしりさつた

ズルズル

ピチュツ

スライムは くつついで さいせいした

第八ゲル 無敵S VS 野生モンスター・トロール (獣人LV.6)

「ニンゲン タオシタ オレ イマ イイキブン」

グチャヤ

「ン……？ アツツ ツイテネエ スライム フンヅケチマツタ
！」

ドスドスドスツ！

「ギ、ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアー！？」

モンスター トロールにしょくりした

第九ゲル 無敵S VS ひよっこ剣士マグナ（剣士LV.7）

「ちくしょう、ちくしょう なんだよアイツら！ ボクだつてウルフまでなら たおせるんだ こどもだからつて バカにするなー。」

ガサツ

「なんだよ モンスターか!?」

モンスター　スライムが　あらわれた

「タイミングわるかつたな
ボクはいま きがたつてるんだ！」
くらええーー！

ビシイイツ！

ひよつこけんしマグナに しょうりした

第十ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍リーダー ブレッド (重複)

スライムがあらわれた

「どりやあ！」

「バシャ……」

スライムがあらわれた

「ぬオオオ！」

「ベジヤ……」

「おい……リーダーさ なんでスライムばつか かつてんの？」

「このあいだの いつけんいらいですね」

「あんがいおっちゃん スライムに やられたんだつたりしてー」

「ガサツ……」

スライムがあらわれた

「まだ
たいめだ
かぐ！」オオ！」

バシイツ！

ブレッヂにておもひした

「「「リーダー！？」」

第十一ゲル 無敵S VS パーティー昇龍残りメンバー（重剣士 賢者 無

「なんだコイツ リーダーを いちげきで…」

「ただの スライムでは ありません ステータスじょひほつが
いっちしない」

「おつちやんを よくも…」

「くらえええ！」

じゅうけんしは マグナスラッシュを はなつた

「しかたありませんね！」

けんじやは スターライトを しょいした

「わがほのおよ てきをやきつくれ…」

ほのほのまほつつかいは プロミネンスを しょいした

ビシッ ドカッ ベチャ

「ぐあ ああ…」

「ばかな…」

「なんじつ……」

パーティー昇龍に しょうりした

第十一「ゲル 無敵S VS パーティーアサシンアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晚餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやつてくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシンアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……つまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであつたり、深い帽子着用であつたり……耳と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人數百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言つた。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく咳く。

「ああがしかあし！……ゴホン……ゴメン、興奮し過ぎた……我々以上に……襲撃を成功させているパーティーは……まだまだ居るだろ？……そこで……明日から……クイクス大陸に向かう……」

「……クイクスに！？……」めん……キャラ作り、キャラ作り

「……」

「我らは……次のランクに……進むべき。それに……！」では……名を知られ過ぎたし……潮時だと思つ……」

「確かに……そうだ……」

「俺は……子供に石を……投げられた……」

「まだいい……ワタシは問答無用で……切り掛けられた……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”的名は、あまりに知られ過ぎてしまつた。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼつたくり商人などをターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行つといふ内容だ。

だが、それはれつきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そんな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遙かに多いのである。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人以外は誰も知り得ない事だろ？。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であつた為に、名は派手に売れてしまい挙げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であつたが口には出さなかつた。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならない！ いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がる事を夢に見ながら！」

「」「リーダー！ キヤラ、キヤラー！」

「あ……うん、『めん』とにかく……打ち上げはここまで……明日の、準備しよ……」

「あの……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

。

「皿……お腹いつぱいになつた？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……」」そつ、帰ろう」」

「さうば」」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保つているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

(何か……居る?)

自分の後ろを影のよつこへばりつき追つて来る何かが、確かに居る。

(なが……)

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投げました。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ一発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なつ……か、変わり身だと……？」

ガサツ……

「しまつ……！」

モンスター　スライムがあらわれた

「えつ……？」

ぱしゃーい！

「わやああああああああああああああああああああああああー！」

？」

アサシンアサルト リーダー クリスにしようとした

第十三ゲル 無敵S √S 初心者パーティー チューリップ (戦士L√・)

「なあ ボクたち だいじょうぶだよね?」

チューリップのリーダー はいつた

「だいじょうぶ つこせつき はがねのつるぎ と てつのよ
い をかつただろ?」

ガサツ
……

「な、なにかいる!」

「よし いつでもこい!」

モンスター スライムがあらわれた

「なんだよ スライムじゃ……ん? なんで こんなところに
スライムが……」

バシイツ! ドスツ!

「 ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい! ?」

パーティー チューリップに しおりした

第十四ゲル 無敵S VS 速射ちガット（銃士LV.11）

「ふん どんなモンスターも おれのはやつちには かなわな
いぜ」

ガサツ

「ん、そこだああ！」

ガットはやつちをしよつ

ベチャア！

「な、おれよりはやいだとオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオ
オオオオオ
オオオ
「！」？」

モンスター　スライムがあらわれた

ガットに しょくりした

第十五ゲル 無敵S VS パーティー美女とケダモノ（トレジャーハンター）

「うう、ちょっとまっておいてかないでよ。」

ガサツ

モンスター　ストライムがあらわれた

「」のにもつはわたしのせんりひんなのひとつたりとも
ばなせるわけないでしょ！」

「ならあしをひつぱるな
はやくあるけ
ペースをみだすな」

「なにがー！」

「なんだよ！」

バチイツ ベジヤツ

۱۰۰

パーティー 美女とケダモノ にしようりした

第十六ゲル 無敵S VS ピーストライマー錦匠と弟子（獣使い）

「ようしょし レベルもあがったし これでおまえも りっぱな
ピーストライマーだ」

「ありがと「ひ」やねーます これでボクも……」

ガサツ
……

モンスター スライムがあらわれた

「むつ やょうじいい あのスライムを なかまにしてみる」

「はい！ えつとまづは エサをなげて……」

バチイン！

「うわああああああああああああああーーー？」

「なんだとーーー？」

ピチヤアツ！

「ぐああああああああああああああああああああーーー？」

ピーストライマー錦匠と弟子に しようとしました

第十七ゲル 無敵S V.S 買い物帰りの少年（一般人）

ガサツ

「うつ……モ、モンスター！？」

モンスター スライムがあらわれた

(モンスターにあつたら しづかに しづかに……)

バサツ！

モンスター
ウルフがはいざからきしゅうを
しかけてきた

11

ドスツ！

「何がいいんだ？」

モンスター ウルフにしようとしたりした

ガサツ

スライムは さつていつた

「 いつたい なにがおきたの……？」

「 うねるは まづせと たまつへした

第十八ゲル 無敵S √S 依頼実行中の男クリフ (レンジャーL√・20)

ドカツ

「グオオオオオオ！」

モンスター ギガベアーにしようとした

「よし いろいろたっせいだ さっさとかえつて ほうしゅうにありつづか」

ガサツ
……

「ん なんだ？」

モンスター スライムが あらわれた

「スライム……？ よし ついでだし たおしてやる……」

バシイ！

「ぐう あああ！？」

クリフに しょうりした

「う、そだ……おまえは いつたい……」

バシイイイイツ！

「先づお手本の本を手に取る事から始め——」

クリフに しようと した

第十九ゲル 無敵S VS 盗賊の男（盗賊L V・22）

男に
しょうりした

「へへへ……かねめのものば もらつていぐせ」

ガサツ

モンスター　スライムがあらわれた

「ああん？…………いまいそがしいんだ うせてなあとで あい てしてやるよ」

パン!

男に しょうりした

第一十ゲル 無敵S VS 双子魔法使いパー・ティー デュアル（氷魔法使い）

7

11

ガサツ

モンスター　スタイルがあらわれた

シングル「アーヴィング」

۲۰۰

卷之三

「あとほぐだいてしまつて……」

「それでおしまい……」

אַלְפָיִם וָאַלְפָיִם

卷之二

ハキイツ！

あああああああああーーー！？」「

パーティー デュアルにしょ「うりした

第一十一ゲル 無敵S VS ベトランパー・ティー・昇龍リーダー ブレッヂ

「ふう もちいれりで のじゅくだな」

「もうですね テントは わたしが はつましょい」

「！」はんは わたしつくねー……トランド コーダーは？」

「あつちで すがりしるよ …… ょせん くやしかったみたいだな」

「ふんつ」

ブン

「ふんつー」

ブン

「はああつー」

ビーン

「ぐおおおオオオオー！」

ガサツ

「でたな
そこかああああああ！」

ドスツ！

パーティー昇龍リーダー ブレッドに しょうりした

第一十一ゲル 無敵S VS 採掘兄弟（採掘人LV.25）

「よっしゃああああついにレアメタルをほりあてたぞ！」

「ほんとか やつたな！ しかしこのちは ぐずいししか それ ないんだが……」

カン カン グニツ

「ん?
なんだいまの……」「

モンスター　スライムだつた

採掘兄弟に しょうりした

第一十三ゲル 無敵S VS 分かれ道の案内人 (L.V. 6)

「わあ あなたは おれとひだり どうひのまに こわまつか
？」

「へーん……みせだー。みせじーく」

「おやですね、ではおやをつけて……」

おじいちゃん
おじいちゃん

(あなたがすこしあが
おのぶこだ
ですかね)

ガサツ

モンスター スライムがあらわれた

「スライムですか
あなたは どちらのみちへ？」

ベチャアツ！

あんないにんに しょうつした

スライムは ちょくしんした

第一十四ゲル 無敵S VS 眼鏡ハイテク (眼鏡レバ・ゼン)

バチン！

スライムは
トラップに
ひつかつた

よしああえものがかかつたぜえ！」

テイ子がきしゆうをしかけてきた

くにゆり

スタイルはトテツアをとりこんだ

— なつ

ライドにておひさしだ

第一十五ゲル 無敵S VS 宿命のライバル ガイズとタナトス（騎士L）

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオ ガイズウウウ！」

「タアナアトオオースウウウウ！」

キンガツトガツビン

いにそ
モ・
カ
モ・
とおれを
たのじませ
空

ガサツ

スライムか あらわれた

ハシベシ

ガイドズとタナトスに
しようりした

第一二十六ゲル 無敵S VS 瀬死パーティーサファイア（戦士 治療師）

「もうおわりか？ チームサファイア」

「ぐ おのれ こんなところで ゼンメツしてしまったのか」

「そうだ せめてやすらかに …… きえてしまえ！」

モンスター レッサー“デイモン”は “デスマフレイム”をしようとした

ガサツ

…

スライムがあらわ

…

ドンツ！

「なつ ス、スライムだと！？ じゃまをするな」

「！？ すきありいい！」

ズバツ！

「ばかな そんなことがああーーー！」

レッサー“デイモン”に じょうりした

「かつた
のか？」

ズドッ！

瀕死パーティー サファイアは全滅した

第一十七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン2（勇者）▼・？？

「いくらあるっても でくちがない …… さては てきのようじゅつか！？」

ガサツ……

「…？ あまい そこだ！」

セインは ソニックカッターツヴァイを しようした

ズバアツ！！

モンスター スライムは バラバラになつた

「あつ またスライムだつたのか …… ものすごい さつきをかんじたと もうつたのに ホントにごめんな」

セインは もうさきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは くつつきをいせいした

「……」

スライムは セインのすがたを きおくした

第一二十八ゲル 無敵S VS 呪咀吐きアン（呪術師LV.41）

「ああ……にくい　にくたらじー」

ガサツ……

モンスター　スライムが　あらわれた

「ああ　にくい　くるおしいほびにくい！　いのちとひきかえに
しても　おしくないほどにくい！　にくいにくいにくいにく
いにくい！」

ベシツ！

「おおのれえええええええ　おまえもにくいいイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

呪咀吐きアンに　しおりした

第二十九ゲル 無敵S VS 賞金稼ぎライル（ソードマスターLV.99）

「わたしに かてるわけ ないだろう！」

モンスターの むれにしようりした

「きわめにきわめた わがけんじゅつ もはや このよに てき
はない！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな …… スライムのばけもの！」

ライルは ヘイズスライサーを はなつた

ズバツ！

スライムは バラバラになつた

「ちがつたか …… うわさの むてきスライムとは いつたい！

……

ズルズル……

「むつ？ こいつまだ……」

スライムは メタモルフォーゼを しようとした

「 なつ …… ？」

勇者セインスライムが あらわれた

第三十ゲル 無敵S VS 賞金稼ぎワイル2 (ソードマスターL・V・99)

「なんだと……」少しつすがたを「ペーしたのか!?

セインスライムは ドラゴンバスターを しようした

ひしゅつ！

ライルにしようとしにした

ベジタブル

セインスライムは もとのスライムにもどつた

「…………ば、おまかせの…………」

第三十一ゲル 無敵S VS 討伐依頼

【重要依頼】

“スライム”一匹の捕獲、もしくは討伐。

【依頼内容】

上記の通り、スライム一匹の捕獲、もしくは討伐を願います。ただし、突然変異体と思しき異常な能力を持つ個体に限ります。出来得る限り生け捕りにし、依頼主の元へ運搬して頂ければ有難いです。

【依頼達成報酬】

捕獲……一千万エン

討伐……五百万エン

【依頼主】

ギルドN. 4649 パーティー昇龍

「おいおい……なんだこの ぼうけんしゃを バカにしたよう

な いらこは

「しかもパーティー昇龍のいらこだと、スライムのこつぴきもたおせないのかよ?」

そのとき ひとりのおとこが ギルドにあらわれた

「ん? あいつは ライルじゃないか?」

「ほんとだ あのてんさいけんしか ボロボロみたいだがまおうにでも こどんだか?」

「よお ライル えうしたおまえらしくねえ だれにやられた?」

「.....スライム.....」

「え?! ?」

「わたしはスライムに まけたんだ! おこギルドマスター、パーティー昇龍につたえておけ、一千万では わりにあわないとな!」

「な.....し、しょうきかライル?」

「ああ、わたしはしょうきだ! ほかくなんでも できんづこない 五千万だ とつぱつに 五千万よつこしろ!」

ライルは、いつも釈迦をのみほして、でていった。

「おおあなた
うらしこな」

ぼうけんしゃらの
めのいろが
かわつた

第三十一「ゲル 無敵S VS 女魔王カルミンシア（魔王LV・？？）

「「ひふふふ できた」

カルミンシアは ばらのはなを まんぞくそうにみおろした

「ああ ゆうしゃセインは まだここにこないのかしら ここではやく ……かれにあいたいわ」

ガサツ……

「…？ だれつ！？」

カルミンシアは ディメンジヨンショートを しようした

ぐばあつ！

モンスター スライムは じくりのはざまに たたきこまれし
ようめつした

「……スライム？ ここまで スライムがはいつてきたの？ け
いびは いつたいなにを……」

スライムに じょうづした

第三十三ゲル 無敵S VS ゼンゼンパーティーパンジー（戦士）

「な なあ ばけものスライムのとつぱつなんて ボクらには
にがおもくない？」

「だいじょうぶだー やつをあやしげなみせで でんせつのせい
けん エクスカリバーを ゼンゼンはたいて かつたじやない
か」

ガサツ
……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな くらえつー！」

ブンツ ボキッ！

「えつ お、おれた……？」

「まさか これは……」

ビシッ バシ！

「「にせものだああああああああああああああああああああー。」

パーティーパンジーにしょりつりした

第三十四ゲル 無敵S VS 扱き使われている村人達（一般人）

「おお スライムがおつたぞ みんなのしゅうつつかまえるんじやあ！」

バタン カチャ

スライムを おりにとらえた

「しかしながら スライムなぞつかまえて ビリするハツハツヤ
やる」

「わてなあ おやくにんの かんがえる」とはわからんわい」

「はたけもたがやせななりねつてのに めいわくなもんだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おー あすこにも スライムがあるでー！」

「ああ ええわい もつおりもこつぱいだあ」

むいびといは ひきあげていつた

第三十五ゲル 無敵S VS パーティー テコモビ (ハンターLV.45)

「そつちいつたぞ テコー！」

「テコじうな チビ！」

デッコーは アイアンネットを しようとした

バサツ

スライムのほかぐに セイコウした

「よくやつたぞテコー！ スライムつかまえてつれてくだけで 五
千万 かるいもんだ」

「しかしへんいしゅ だとか …… こいつは ただのスライムだろ」

ガサツ…

モンスター スライムがあらわれた

「おつ またでたぞテコー！」

「いいかげんにしろー おれはテッコーだチビー！」

バサツ

ブチツ！

「 「えつ……！？」

ベシツ バシイ

「 「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああ

あああ！」

パーティー デコナビにしようつした

第三十六ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍 リーダー ブレッジ

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「ぐわぐわく……さがしもとめていたよ あれから くんれん
をくわかえし かんせいしたわぞ とくとみよー」

ブレッジは スライムキーを しようとした

スドンー！

スライムは ジハパミジンになつた

「やつた……やつた ついにかつたぞオオオ！」

「わーん むにゅ……かつたぞー……」

ブレッジは むぬをみてくる

ゆめのなかで スライムにはいぼくした

第三十七ゲル 無敵S VS 迷子勇者パーティの一人 ファル（超魔導師）

「たおせ～すすめ～」――――――

ガサツ……

「ん？ モンスターかなー？」

モンスター スライムがあらわれた

「スライムー？ なんでこんなとこに？」

ひゅつ！ ビワツ

ファルのナップザックがやぶれ ふんまつがまつた

「うわっ あぶないなあー …… ただのスライムじゃない？」

スライムは こなをかぶつた

「………………………………？」

スライムは ほつかいした

「えつ？ なんで……？」

スライムに じょうりした

「まつ いいか すすめ～」

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェン

「スライムかー スライムといえば セイそくあはゼーになる?」

「だいたいせかいじゅつ どににでもいる それよりもこのばあい スライムのとくせいをしらべる べきだ」

「それこそむいみ へんいしゅと ふつうのこたいの ちがいをしらべるべき」

「まずは あるくべきでは? ミーティングもいいが それだけでは むいみだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「だからだな……」

「ちがうー」

「むいみー！」

「りかいふのうー」

バシバシバシバシ！

「 「 「 「 ばか なあ ああ ああ あずの うが まけた ああ ああ ああ ああ ああ ああ
! ? 」 」 」

秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミー二
スに しょ うり し た

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティーマナバヤアタケラア・ヌヴェン

豆知識

マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

訳……偉大なる高みへと到達せんため常日頃より神の知識に触れる
続ける賢い四人組

因みに略して、マヌケ

第三十九ゲル 無敵S VS 矛盾商人チャック（商人LV・37）

「このたては すべてのこうげきをふせぎ このほこは あらゆるものをつらぬくよ！」

「なら そのほこで たてをついたら どうなるの？」

「えつ あ あー……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「どうなるの？ ねえ」

「そ、それは……」

スライムの こうげき

バガーン！ ベキイツ！

「ああっ さこきょうのたてどほこがこなにいいいー！？」

ベシツ！

「うわああああああああああああああああああああああああー！？」

矛盾商人チャックに しうりした

第四十ゲル 無敵S VS スライム保護団体（会員 × 3）

「はんたーい はんたーい スライムのらんかくを ゆるすなー！」

「スライムをほりしるー やばんなほりたんしゃーじこ てつこをー！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おおっスライムだ 」わがらなくていい われわれは きみたちを ほりしに……」

バシイ！

「ぎやあああああああああああああああああああああーーー？」

「かーちゅうーー？」

ベシャ ピタンー

「うわああああああああああああああああああーー？」

スライム保護団体に しょりつした

「おねがい わたしもたたかうわ かたきをつたせてー。」

「ダメだ。きみはてをよじっちゃいけない。」

「どうしてー!? いせりつてこつてくれたじ
かたきをひつめで やないー。」

「あれは……」

ガサツ

モンスター　スライムがあらわれた

「うそつき！　わたしは、わたしはつ！」

「ちがうー。おれは……」

ビシツ
バシイ！

パーティー ラブアンドピースにしようとしました

“うーん……どれもちがいます。これではしょ、ひさんばはら
えません”

「くそっ 昇龍のれんちゅうめ！ スライムはスライムだろ ど うちがうつてんだ！」

ガサツ

モンスター
スライムがあらわれた

「ちよつびっこ
てめえのせいで とんだむだほねだ
はじから
オオ！」

スライムは カウンターをくりだした

ドカラツ！

「ごめんなさいが、どうせここがいいんだから、もう一度、おまかせください。」

ルーフにしようとした

第四十三ゲル 無敵S VS パーティー ローンウルフズ（ロック吟遊詩人）

「は？　スライム？　んなもんに　きよーみねえし」

「おれたちさ
せりたい」と見るだなんだな」

いやでもほうしゆう五千万だつて……」

「ご、五千万！？」
「……なんつーか
スライムていま
どスト
ライクだし！」

ガサツ

モンスター　スライムがあらわれた

ビシツ
ガスツ

「ひつ
お、おれはなんのかんけいもな
.....」

ドグッ！

パーティー ローンウルフズに しょうりした

第四十四ゲル 無敵S VS 修羅場中パーティー アーリースカイ（女戦士）

「なんなのよアンタ！　スカイからはなれなさいよ。」

「えーーなんでですかーー？ もしかしてえー、スカイさんとアリイさんはあそーいうかんけいなんですかー？」

！？ そ、そんなわけないでしょバカあ！」

まあまあふたりともなかよくなかよく……

「うーーー、おふたりともおしあわせにー。」

九三
九三

モンスター　ステイムがあらわれた

（スカイのバカバカ！ だいつきらい！）

ノンツ

「あつ スカイさん！？」

「アリイは ぼくがまもるんだああー！」

バシン

「わあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあー？」

（そうなんだ これがふたりのつよいきずな ……かなわないな
あ ホント）

パシイツ！

「わやあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあわあー？」

パーティー アーリースカイにしおりした

第四十五ゲル 無敵S VS ベテラン部隊 ストロベリー・パフェ (ソルジヤー)

「そつちだあーー。そつちでおこりんだぞー。」

「なつ！？ どうしたクッキー！ ちつ、レンガよ クッキーが

「なつ…………わ、やられたといつのか？ そんなバカな…………」

ガサツ

1
?

モンスター スライム が

う うわあああああああああああああああああああああああああああああああ

第四十六ゲル 無敵S VS 復活の神殿の人々

「わいきんは ふつかつのいのりを うけるものが ふえています
ね」

「そうですね」

ガサツ……

「むつ！？ だれですか！」

モンスター スライムがあらわれた

「なぜモンスターが！？ おいだしてしまえ！」

「まちなさい ……かれはきずついています かいふくのじゅつ
を」

「しつ しかし モンスターですよ？」

「かけておやりなさい！」

「はい……」

ホールは かいふくのじゅつをとなえた

スライムは かいふくした

ズルズル……

スライムは でくちへと すすんでいった

「な なぜ……？」

「モンスターにも こころがあります それをわすれてはいけま
せん」

第四十七ゲル 無敵S VS 香田の美女シーラ（救済者LV・？？）

「アナタは なんなのです？」

ガサツ

モンスター スライムがあらわれた

「なんだか すぐ かなしそうです」

“……”

「きかせて あなたのオモイを……」

シーラは ダイブインマインド をしようとした

“…………る、…………ん…………く…………あ…………う…………む…………ない…………”

「えつ？ よくきこえない…………？」

バシイ！

スライムの いづべき

「わやつ…………」

スライムは にげだした

「あつ、まつて！……どうして どうしたなの？ きらいなか
つたの はじめて……」

「ううう
くわい なんだかふらふらするし さむけがするぞ
?」

ガサツ

モンスター スライムがあらわれた

「ちくしょう スライムかよ……きょうはみのがしてやる なんだか はなもむずむずしてきやがったしな！」

一ノ瀬さち子

ベインに じょりした

「ああ、じゃあ、たしかにうれしくなったば

バタ

スライムはたちさつた

第四十九ゲル 無敵S VS 被害者代表フレッドとクリス（重戦士 アサシン）

「ふうううん！ はあああつ！」

月光照らす野原の上で、一人の男がひたすらに剣を振るう。少しでも腕に覚えの有る者ならば分かるだろう、荒れ狂う波にも明確な法則があるのだと。

男の名はフレッド。かつてのパーティー昇龍のリーダーであり、かつて魔王打倒でさえを目標にした男。

だが……そんなものは無価値だつたと、彼は言つた。

「俺様は……いや俺は、勝ちたい……」

頭を丸坊主にし、何故か片眉を剃り落とし、どうしてか上半身裸で素振りを続ける彼。その鬼気迫る様子は東洋で言つところの赤鬼か閻魔大王か、である。

「やああ！ だりやああああ！ ……何か用か」

ピタリ、と素振りを突如止めた鬼は言つ。

「やつきからずつと、こちらを伺つてゐよなあ？ 誰だか知らんが出てこい、相手になるぞ」

フレッドの指摘した木陰から、それは素直に月の下へと現れた。

「わすがです……パーティー昇龍……リーダー……ブレッド殿」

「女、か。残念だつたな、俺はもうリーダーではない。ただの一冒険者だ」

「そうでしたか……しかし……パーティーの方は……あなたの帰り……待つてましたが」

ハエがブンブンと頭の周りを回つてゐみたいな調子で、女は語る。だがブレッドには、不思議と一言一句がはつきりと響いた。

「では……一つだけ、お聞きしても？」

「内容次第だが」

「……申し遅れましたが、私はアサシンアサルトというパーティーのリーダー、クリスといいます。名前位は知つていてるでしょう？」

女は顔を覆う覆面を外し、言った。月光があるとはいえ、微かに口元と目元が見えた程度だ。

が、ぶっちゃけて言うならば期待通りの美女であった。ブレッドが以前公言していた好みのタイプ、それともピタリ合致する。

「スライムに関する依頼……あれを出したのはあなた？」

クリスは問う。依頼とは、無論アレの事だ。今世間で話題騒然の

ヤツなのだ。しかしづレッドは知らんーと一喝。更には詳しく教えるとさえ書いて来たのである。

「えつと……だから……突然変異スライム討伐で五千万エン、とあなたがリーダーだつたパーティーから……依頼が出てるの」

「なんだとおおー？ 馬鹿かあいつらめ……”パーティー昇龍は無様にもスライム如きにやられてしました”と声こぼらしてる様なものではないか！」

「まあ、そんな些細な「タタタタは放置して……」

「些細だとー？ 放置だとー？」

「つまりアナタは、とてもない素早さと攻撃力、知性までもを兼ね備えた化け物スライムに負けたという事だりうー！」

「ち、知性があるのかは知らんがそつだ！ 信じられるのか、この惨めで無惨な俺様ををー！」

「ええ」

「……え？」

「ええ」

「え、ええええ？」

一言どひひか一文字。

「私も、そいつにやられたからだ。ただのスライムと変わらない外見だった……」

ガサツ……

「「「！？」」

モンスター　スライムがあらわれた

「ほう、噂をすればなんとうや、か。丁度いい……」

ブレッドは戦闘態勢に入る。

「……私もだ、私にも戦わせて貰う」

クリスもまた、戦闘態勢を取る。

「引っ込んでる、アレは俺の怨敵よ」

「なんとやらを、なんたらや、とか言ひ男は危ない。お前に口を引っ込むがいい」

「……好きにしろ。ただし邪魔はするな」

「お前こそ」二人は同時に駆け出した。

つづく

ビシイイイイイイイ！

被害者代表らに しょうりした

この世界において“最強のモンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

意見様々、異種異論はあるが大概の人々はこう答えるであろう。

“魔王”と。

「ふふつ、もうちょつと」

天高くそびえ立つ魔王城、その最奥の一室にて魔王と呼ばれる者は密かにほくそ笑んでいた。

魔王“カルミンツァー”である。漆黒の鎧を身に纏い、一本の角は雲を向く。それは代々続く由緒正しき魔王の血統の証だ。

だが魔王とはいえ、れっきとした女でもある。初め女性であるからという理由で魔王候補が乱立しかかった事もあつたが、最近はその実力を思い知ったのか異論を唱える者もいない。

「……何をなさつておいでです、カルミンツァー様」

「ああ、ドクトル。見て分からぬ？ 部屋を薔薇の花で埋め尽くすかと思って、一本一本植えてるのよ」

ドクトル、と呼ばれた白衣の男は、シルエットの約半分を占める程の巨大な頭を揺らし、言ひ。

「見れば分かります。その様な行為をなさる意味を訪ねているのですが」

「それはね、勇者セインの為よ。彼がここへと辿り着いた時こそ、最後の戦い……それをより派手に演出すの。攻撃の度に花びらが散るなんて絵になると思わない？」

「勇者セインですか。貴女は口を開けばそればかりだ。既に悪魔四天王も敗北しました、暗殺でも闇討ちでも行えればいいと考えますが」

「ふうん、ねえドクトル……あなたももつと感情的になりなさいよ。人間でも唯一私の目にかなつた者、そう、セイン。でも私は魔王だった、許されざる関係、覗く悲劇。それを精一杯飾るのに意味は無いかもしれないけれど、気分は凄く高ぶるの。どちらかが歴史の一ページになるのは必死、だけどそれが私であれ彼であれ、ただの一枚じゃツマラナイ……アナタに分かつて？」

「理解に苦しみますな」

「ま、いいわ。ちょっと出掛けで来るから」

「また……奴の所ですか」

「野暮はなしにして頂戴。じゃ、留守は任せたわ」

魔王は窓を開け放つ。雷と暗雲と時々強風……背中のハウモリ状な翼を広げ、飛び立つ。向かい風を切り裂き推力に変えて。

「……ふん、ヒロイン気取りの小娘が……。私の様な知識を持つ者こそが、王に相応しいのだ……なあ、わたしの可愛い可愛い……」

ガサツ……

・

勇者セインは、道に迷っていた。なんとか山を一つ越えた、が、仲間とは依然はぐれたままだし、そもそもここがどこか分からぬ。

「うう……は、腹が、減つて……目眩が……」

山を下り始めた頃合いからか、モンスターが一匹たりとも現れなくなつた。現状、モンスターを求めるセイン、理由は人間三大欲求の一つ、食欲。

「く、そ……なんで……モンスターがいないんだろう……め、メシ……」

遂に膝が地に付く。景色が暗転しげにやぐにやにねじれて来た。最早限界か、という時に彼を救つたのは一陣の風だった。

ふわつ、と鼻元を抜ける風。心地よい……肉の香りが！ 風に肉の香りが混じつていいではないか！鳥か豚かそれともゴブリンかそれともそれとも……この際何の肉でもいい、食えさえすればなんでも構わん！ セインはがばと瞬時に身を起こすなり、警弓が如く駆け出した。

「メシだああああ！ メシのおお匂いだああああああ！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれ……

「メシいいいい！」

ゲシツ！

「…………？」

スライムに しょうりした

さて、勇者は凶悪スライムを撃破したことにも気付かず、匂いの発生源、即ちポツンと建つた古びた屋敷に辿り着いた。かなり前に放棄されたのか、外壁のレンガはひび割れ或いは欠け……名も知らぬ植物のツタが絡む。

どう見積もつても、二・三年は人が居なかつたであろう屋敷。しかし空腹勇者は一直線に扉へ向かい、ドンドンドンと激しくノック！

「すいませええん、誰かつ、誰かいませんかつ！」

本当は誰かが居ると分かってる。嗅覚刺激がなによりの証拠だ。

「はあーい……あら、勇者セイン様」

「え？ ……ええええ！？ カルミーさん！？」

そう、勇者と魔王は顔見知りだったのです。

第五十一「ゲル 無敵S VS 勇者セインと魔王カルミンジャー2（勇者 魔

「 いただきまーす！」

セインは りょうりにとびついた

「 ふふふつ セインをまたら よほどおなかを すかせていたのですね」

「 あハ ！」、これはしつれい おみぐるしへとこのを……」

「 いいえ おいしそうにたべられるのは なんだかうれしいです
セ、ジンジンたべてください」

「 あ、 ありがとうございます ほんとうにカルミーさんの りょ
うりはおいしいです！」

たべるセイン ながめるカルミンジャー

「 ん！？ カルミーさんさがつて なにかいる！」

「 えつ？ ええ……」

（たしかに ……なにかしら ）のまがまがしい けはいは

ガタツ ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライム？……いや ちがう もつともつどじやあくな
にかだ」

スライムは メタモルフォーゼを しよひした

スライムは ゆうじゅ セインの すがたを「ペーした

「「なんだとー?」」

第五十三ゲル 無敵S VS 勇者セインと魔王カルミンシャー3（勇者 魔

キーン！ カン！

「くつ じにつ の「ひつよくまで」いつしょなのかー…？」

（たしかに ……あの「ひつよくまで」セインにまわるともおどりなー）

「…！…！」

ぱしつー！

セインのつるぎせ くだけた

「しまつたー…？」

スライムの つじげき

「セインは ……やらせないーー！」

カルミンシャーは アブソリュートゼロを しょりした

「…！…！…！」

スライムは「おつつき」になーなにくだけた

スライムに しょりつした

カルミンツァーはほんらいのすがたにもどつてしまつた

「…………え、カルミー…………さん？」そ、そのすがたは…………？」

「…………セイン…………ばれちゃったか」

「おせか、そんな…………カルミーさんは…………」

「そ、う、わたしはまおう、カルミンシアーナの」

第五十四ゲル 無敵S VS まあまあパーティー タンポポ（戦士）V

「な、なあ おれたち だいじょうぶだよな？」

「だいじょうぶを しつかりと たんれんをつんできたじゃない
か！」

ガサツ
……

モンスター スライムがあらわれた

「くつ スライムなんぞ ひとつねりだ！ いくぞ てんちのか
まえ！」

「おおっ はじやのかまえ！」

スライムは よつすをみている

「「くらえひつせつ てんちにんよつあつせめつせつせじやたい
せいかおおばんちかになんかせいじょ、ガリシ……」」

ふたりは したをかんだ

ビシ バシイ！

「「うわあああああああああああああああああああああああ
ああああああん！」」

パーティー タンポポにじょうりした

第五十五ゲル 無敵S VS パーティー味噌醤油風味

ビシッ！

ドスッ！

「なにかあるかね？」
「ああ、あるよ。」

スライムは しょうりした

！ ひ せひ べ

パーティー味噌醤油風味に
しょうりした

「一キャラが外に出る！」

ガサツ

モンスター セイインスライムがあらわれた

「おとめつですか？」

セイインスタイルは
うなずいた

卷之三

チヤリチヤリ

セイシスライムは、ヨコハマのハンを、しばしばた

「あ、ありがとうございます」と、3000円を二枚渡す。「はい、ぱんですねー」

セインスライムはうなずいた

「では303号室です」

セインスライムは へやへと いそいだ

(みつけたぞ むうしづセイん……)

「へいのおとこは セイシスライムの あとをつけた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004x/>

無敵スライム

2011年11月25日18時56分発行